— 円盤と宇宙哲学の研究誌 —

日本GAPニューズレター

—1963—

3月・4月

日本ＧＡＰニューズレター

1963 — 3月4月号

目　　次

おだやかに、賢明に、忍耐強く …… G・アダムスキ　1

ヒプノティズム、メズマリズム ヴードゥーイズム …… G・アダムスキ　4

円盤問題における心霊的な詐欺行為 …… C・A・ハニー　6

質疑応答 …… C・A・ハニー　12

現代の宗教の起源 …… C・A・ハニー　15

デスモンド・レズリーからの手紙 …… 18

ＧＡＰ本部の近況 …… C・A・ハニー　21

宇宙の意識 …… G・アダムスキ　23

編集後記 …… 25

おだやかに　賢明に　忍耐強く

G・アダムスキ

世界中の罪のない善良な人々にたいしておこなわれているサイレンズ・グループのあつかましい暗躍ぶりを指適しようとするハニー氏の努力にたいして、私は敬意を表するものです。

きわめて功妙に組織されているこの暗躍勢力は、今や必死になっています。現在彼らは希望的観測をもって私のような人間を抹殺せんものとおびやかしています　これについて私は証拠を持っています。というのはかつて私が信用していた一個人から私は脅迫状を受けとったからです。彼らがまさかこんな手段に訴えるとは信ずることができませんでした。この手紙は個人の署名つきで来ましたが私としては彼らは無知なのであってこんなやり方がどうした結果をもたらすかに気づいていないのだろうと思います。

真実が表面化するにはときとして長い時日を要しますが、いつかは明らかにされます。チューリッヒで私はひどい目にあいましたが、そのとき私の講演が妨害された理由は今私によくわかっています。私は病気になり、肺炎を克服するためにつらい日々をすごしました。その当時でさえも反動勢力が二方面に働きかけていました。世界講演旅行と自宅の両方にです。病気が回復してのちも私の仲間にたいして妨害が試みられましたが、私が法則の知識をもっていたために助手を悲惨な目にあわせないで済んだのです。

そこで私は暗躍グループの活動を指適するハニー氏の記事を、読者が注意深くまじめに読んで下さるようにお願いしたいと思います。ただし恐怖心をもって読んではいけません　恐怖は暗躍グループの武器の一つであるからです。こうした勢力が活動し始めるときにそれを見分けるのは容易です。たとえばその徴候として例をあげますと、一生懸命に働こうが働くまいが、肩甲骨間の緊張すなわち頭部が脊推骨に連結する場所の緊張はひどい頭痛をおこして洞察力に影響を与えます　するとかつては論理的な考え方や理性が想念の基礎となっていたのに、それにかわって不信と疑惑が入り込んで来るようになるのです。恐怖心のともなった混乱状態と筋肉運動の共同作用の欠乏は、本人を絶えまのない防衛状態にします。すると、ときとしては本人は自己憐びんと迫害コンプレックスにおちいり、かつて信用していた人を恐れるようになるのです。

そこで本人は心の平静さをとりもどそうとして聖書を読んだり不安な心を静めるために他の修養的な方法を応用したりするのですが、満足すべき結果は得られません。本人の正常な理性はもはやなくなっているからです。

例をあげますと、私を殺してやるという前記の脅迫状は本人の精神修養がまだなっていないことを示しています。さもなければこんな手紙は書けないでしょう。

かかる問題を解決するためには、状況にたいする理性的な理解力をもたねばなりません。たがいにゆずり合う相互扶助の精神が

必要です。関係国が各自の諸問題をすすんで相談し合って責任を分担しないかぎり、相互破壊のともなわない戦争は決してなくならないでしょう。話し合えば戦争の危険は消えて平和は回復されます。両方のがわの誤ちをみとめて、しかるのちそれを許し、忘れてしまうことです。

過去の一協力者から昨年九月に私宛に送られてきた手紙によってひきおこされた混乱と誤解とを解決するために、私は海外の全GAPのリーダーに対する私信としてこの紙面（注。ハニー氏のニューズレター）を借りることにします。これから述べる声明は私自身の声明ですから文責は私にあります。

過去の関係の解消に関する例の出来事について、みなさんはその話の一面のみしか聞いていないということ、あらゆる話には二つの面があるのだということを先ず銘記して下さい。世界講演旅行で私がみなさんをお訪ねしたときのことを思い出されるでしょうが、私はあの当時協力者たちをほめたたえて、彼らの能力をこよなく信頼している旨を述べました。しかし今は状況が異なっています。

発生した出来事について私はこれまで沈黙を守っていましたけれども、混乱を解決するために記事でもって説明する必要がおこるかもしれません。なぜなら書かれた文章はその意味内容に関して他人の個人的な印象でゆがめられることはないからです。それゆえ忍耐強く待っていて下さい。如何に悪質な陰謀によって罪のない人々がだまされているかという事実を万人に伝えるために、この次に出す私の書物のなかで以上の事件を引用する必要がおこるかもしれません。だれしもグロリア・リーのようになりたくはありませんし、死でもって代価を支払いたくはないでしょう。またこの暗躍勢力のために替玉になって死んでいったフンラートやウィルキンスンの二の舞いをふみたくもないでしょう。

それゆえ、ハトのようにおだやかに、ヘビのように賢明になることが大切です。当事者からの直接の声明を聞きもしないで結論に飛躍したりデマやうわさにとびついたりしないことです。われわれが最後の真実の瞬間に近づいてゆくにつれて、デマやうわさはますますひどくなるでしょう。この暗躍勢力（サイレンス・グループ）は人類の向上のために働く人々のすべてを妨害しようとするでしょう。ですから気をつけていて、世界的な組織をもつ反対勢力にまきこまれないようにして下さい。

私の土星旅行に関する体験記がハニー氏の機関誌に掲載されなかったことについて、これまでかなりの誤解が行なわれてきました。このような知識（注。体験記の内容を知ること）を求めるのに必要な謙虚な心というものが一般大衆にはないのです。そのため一般人向けの記事としてその体験記がハニー氏の機関誌に載せられることはありません。

体験記のコピーは特に希望される方にのみおわかちすることになっています。土星旅行から帰ってワシントンへ伝えたメッセージはキューバ問題その他の事件の解決に絶大な役割を果たしています。しかし紛争はまだ終ってはいません。

右のメッセージのためにわれわれがこんにちもなお生き続けられるということに感謝してよいでしょう。あのキューバの危機から人類を救ったのは宗教や秘教団体ではなく、冷静な現実在義者すなわちときとして物質主義者と呼ばれる人々でした。彼らこそ

人類の向上のための真の働き手であって、責任回避者や羽を生やしてどこかへ行ってしまおうとする人々が真の働き手ではありません。われわれはあらゆる物事を宇宙人にやってもらおうとしていますけれども、われわれ自身を助けてもらおうとしているのではないのです。

神は木にリンゴをならせて人間にかわってそれをふるい落としてもくれますが、われわれがその恩恵に浴そうとするのならみずからリンゴをつみとって食べなければなりません。神は人間のために多くの物事をやってくれますけれども、各人は神の指図にしたがって自分の手で行なう必要があります。これは宇宙人から与えられる教えについても同じことがいえます。その教えはわれわれの過去に照らした上でのわれわれの人としての存在にたいして必ずしも心地よいものではないかもしれませんが、それはちょうどヒマシ油が心地よくなくても自分のからだのために飲むのと同じことです。

最近宇宙人から多数の手紙が多数の地球人へ送られました。なかには一通以上も受けとった人があります。これは受けとり人の謙譲さとまじめさをテストするために発送されたものです。その手紙のなかには或る人々の弱点や誤解が指適してありました。或る人たちはこの手紙を無視し、或る人たちは疑いの目をもって読みました。この人々の内部に真理がたかまって、本人の役立とうという願いが非利巳的なものであったら、彼らはその手紙にともなっていた祝福を感じながらそれを受けとったことでしょう。なぜならこの計画は土星の会議できめられたからです。

この文明の存続が達成されるためにそれを援助しようとする地球人は、自我と個人的な私欲を忘れて他人の啓蒙の奉仕に全力をつくす必要があります。自我を満足させるのがよいでしょうか。それとも文明を救うための理解の言葉を身につけて、無知の荒野で泣いている多数の人を救うのがよいでしょうか。

始めに多数の人が奉仕するように求められたのですが、人々の自我は何かを捨てることができず、真実に直面することができませんでした。その結果、残った人は少数でした。聖書の時代から歴史は変わっていないように見えます。というのは例の魅惑的な出来事（注。円盤飛来事件）が過ぎ去ったあとでは宇宙の法則を探求することを選んだ人はほとんどいなかったからです。もしこの時代が一つの〝失われた文明〟になるとすれば、横道へそれた人々の一人一人が自分の任務を果たさなかった責任をもち運ぶことになるでしょう。このためにその人々は脱却することができません。

イエスがエルサレムをなげき悲しんだ理由をわれわれは知っています。地球人が宇宙の兄弟（注。宇宙人）の忠告を受け入れるのを拒絶している現在、地球人は同じような真剣さを欠いているといえないでしょうか。すでに期限のきれた地上の修正という仕事に〝自然〟がとりかかってから——今やとりかかろうとしているのですが——忠告を受け入れても遅すぎるでしょう。そうなると祈りや冥想や賛成の言葉などが人間を救うことにはなりません。それはちょうどこんなものが戦場で命を失った無数の人を救わなかったのと同じです。人間はヒューマニティーのために何事かをなすチャンスがあった場合にもそれをやらなかったことからこのことがいえるのです。

自我のために生きたり生活を夢うつつにすごしたりして人間は〝至上なる英知〟の物事を学んだりその目的の真意を知ったりすることができないのは、あたかも自動車をただ眺めていたり自動車の夢を見ていたりして運転法を学ぶことができないのと同じことです。実際の体験というものを教師にしなければなりません。そして人間はたがいに接し合うことによって学びますので、体験は奉仕を通じてのみ得られるのです。

しかしなかには人間の低級な個人的な属性を克服して勝利を得る人もあるでしょう。体験を通じて知識を獲得するでしょう。その人たちはいつか法則の下位から脱け出してその上位にいるでしょう。そして最高の山を登る力を身につけるでしょう。たとえ足もとの基礎は弱くても、体験の楽しさ、不愉快さのいかんにかかわらず前進しようという決心をもつでしょう。そのときこそ宇宙が展開するのであり、本人が自分を生み出してくれた〝父〟を理解し始めるときです。こうして本人は〝無限者〟になるのです。

ヒプノティズム、メズマリズム ヴードゥーイズム

G・アダムスキ

多数の人が次のように質問します。「右の三つの相違はどのようなものか」「三つとも同じものではないのか」基本的な原理は同じことなのですが、あらわれる結果はみな違います。（注。ヒプノティズムは暗示による催眠術、メズマリズムは動物磁気催眠術、ブードゥーイズムは西インド諸島及び米国南部の黒人間に行なわれる迷信的慣行で、魔法、まじない、ヘビ崇拝、人身御供などを含む）

各例における最初の段階は、親切さと甘言などによって個人の信用を獲得することにあります。被術者が術者の意のままになる前に、術者は相手の完全な信頼を得ておくことが必要なのです。ヒプノティズムは外科治療や病気なおしに有効ですが、ただし熟練した医師の手でおこなわれる場合にのみ有効です。それ以外の人によって施行されても有効ではありません、医学的な治療としてでなくゲームとして面白半分にやりますと、ひどい害を及ぼすことがあります。信頼し得る術者のもとへ行くのでさえも、あまりひんぱんに施術を受けてはいけません。この術は被術者の意志を弱める傾向があるからです。

今日大多数の人間は自分自身で作り出した見せかけの生活のなかで自已催眠にかかった状態で生活しています。〝肯定〟や〝否定〟などもその一つです。大多数の人が或る物を持っているからといって、なぜ人はその物を肯定しなければならないのでしょうか。だれもが持っていることをあなたが肯定するとすれば、あなたは自分が持っていないことと、自分でそれを得ようとしていることをみずから認めることになります。一方、あなたが持っていないからといって、あなたはそれを否定する理由があるでしょうか。このいずれの場合にしても、混乱以外のなにものをもたらし得ない力（複数）をあなたは分割していることになります。催眠術はしばらくのあいだ被術者を満足させるかもしれませんが、それは長続きしません。一時的な幻覚にすぎないからです。この方法を利用する人は真実に直面するよりもむしろそれを安易な出

口と考えています。しかし結局それはゆがみと失望とをもたらすだけです。

メズマリズムとヴードゥーイズムは同じものなのですが、ヴードゥーイズムのほうが残酷です。それが及ぼす影響はきわめて広範囲にわたっています。被術者は術者の言葉をほめたたえてその意志に従うようにされますので、開始の方法はヒプノティズムとほとんど同じです。被術者は自分の最も忠実な友に逆らうような気持ちをおこすまで術をかけられます。被術者にたいして思いのままに考えさせたり行動させたりするために、術者はあらゆる種類の甘言をろうします。被術者が術者を疑ってかかったり、忠誠ぶりをあまり示さないと思われる場合は、ときとして術者は被術者に高価な贈り物を与えたりして恩を着せようとします。望ましい結果を得るためには数年かかることもあるでしょう。いかに多くの人がこの方法を利用しているかに驚くほかありません。白人のなかにもこの信者がいて、特にヴードゥー教を宗教としている未開の黒人と交わっている白人にそれが多いようです。

このヴードゥーイズムの信者は最初の傾向として現在の生活の態度に不満を示すようになります。そして自分のおこなった奉仕を一時は楽しんでも、次第にそれはくずれ出して、疑い深くなり始めは信頼した術者を信用しなくなります。そんな失望の状態に追い込んだ責任者の名をあげようものなら、術者の激怒によって暴行沙汰がおこることもあります。こんな事態が発生すると、術者が信者にこれまで加えてきたリンチがいつも成功したという証拠が示されます。

このヴードゥーのまじないにかけられた人は、理性、推理、知識などのすぐれた性質を失い、自分自身がわからなくなってしまいます。心がからっぽになったような気がするのです。いいかえれば信者はすっかり洗脳されてしまうために、そのからっぽを満たすためにあらゆることをやってみようとします。こんな状態のもとにあっては、実行力のある人も仕事を失い出世の機会はなくなってしまい、自分の能力をべつに必要としないありふれた仕事を求めるようになります。

本来の自分を失ってこんなふうに変わってしまうと、本人は自分にばかりでなく自分を愛してくれる人にまでトラブルをおこし始めます。時としてもとの自分に返ろうという望みが心におこることもありますが、恐怖心の為に返ろうという決心と力を持つことができません。もと持っていた自信をなくしてしまったのです。

術者は一応の目的を達成したために次第に関心をそらしますが術者の影響は信者に残っています。この信者たちが本来の姿に返るのを援助することのできる人は、理解して何をなすべきかを知っている人です。

これに似たメズマリズムは、おこなわれている物事の真相を見きわめるほどの知恵を持たない人で、かなり強固な意志の持ち主にさえもかけることができます。

ヴードゥーイズムのなかには信者に苦痛を負わせたり、死に至らしめるのもありますが、詳細に述べるには多くのページを必要とします。こうした状態から逃がれ出ようとする多数の人々を私は助けてきましたので、これについて私は個人的な体験をもっています。私に対抗して或る団体（複数）がこの種の催眠術を試みてきましたが、私は彼らに成功させてはいません。

円盤問題における心霊的な詐欺行為

C・A・ハニー

これまでアダムスキ氏と私が一般に知らせないようにしていた情報の一部を洩らすべきときが来ました。今まで私はこの情報を伝えるにはまだ機が熟していないと考えていたのです。しかし二、三の物事がおこってそれが私の心を変えさせました。ベンダー著の〝すべてを語ろう〟という書物がその一つの動機です。別な動機は、ベンダーがその著書で述べているのと同じような立場にある人たちが援助を求めて私のところへ来るようになったことにあります。

助けを求めて私のところへやって来る人のなかには、心霊現象の悪夢にうなされているのがいます。この悪夢が彼らの精神的な破滅をもたらせたのです。世界中の人々がこれと似たような体験をしていますので、なぜこのような体験がおこるのか、なぜこうしたことがますますふえてゆくのか、といったことについて、今はきっぱりとその理由を明らかにする時機です。

アダムスキ氏は著書や講演などによって、氏が接触した他の遊星の住民は心霊的な（または心だけの）連絡をおこなわないときわめてハッキリと述べてきました。われわれが読んだ心霊上の刊行物によりますと、心霊研究界のリーダーたちは「アダムスキ氏は実際には宇宙旅行を霊魂でやったのであって、自身はそのことに気づかず、それが肉体的なものだと思っているのだ」といっています。しかしこれは全くのたわごとです。

なぜ遊星の人々は心霊的なコンタクトをやらないのかといいますと（正しいテレパシーによって感受される印象は心霊的なコンタクトではありません）、その理由はきわめて簡単です。地球人の心は、個人の既成概念や信念にしたがって、もたらされる知識に色をつけてゆがめるからです。このことが宇宙人から送られて来たと称されるメッセージ類が子供っぽいナンセンスにすぎない理由の一つです。他の遊星のブラザーズは恍惚状態におちいる霊媒を利用することはしません。

アダムスキ氏が語ってきたところによりますと、氏はかつて何度も「砂漠またはこれこれの場所へ行け」という強い感じをもったことがあって、そのたびに「これはたしかに宇宙人から送られた印象にちがいない」と思って現地へ行ってみると何事もおこらなかったという例がよくあったということです。これは氏自身の希望的観測（注。こうあってほしいという願い）のトリックだったのですが、しかし氏にとっては現実そのものであったわけです。

テレパシーの能力を駆使するほどにはるかに進化している他の遊星の住民といえども、感受する印象が正しいものかどうかを調べるためにきちんと確証を求めているのです。高次元の世界（注霊界など）の人間から送られたと称されている多くのメッセージ類を載せている円盤研究誌、書物などは誤りを促進しています。宇宙人はこれと関係はありません。こうしたメッセージ類の殆ど

は、地球上の混乱した人間の心から発せられる想念に接触する霊媒自身の潜在意識からもたらされるのです。

だからといって心霊現象のすべてがインチキだというわけではありません。真実の心霊現象も多く存在するのですけれども、通常はそれが誤って解釈されるのです。多くの心霊現象や実験ではまるで宇宙人とコンタクトしたかのような体験例がおこりますが、重要な相違点が一つあります。それは真実の遊星人は関係ないということです。しかし悪魔的なあるグループがこうしたコンタクト例に関係があって、個人の感受性やだまされやすい性質を利用しています。

宇宙人だと自称している人や、いろいろな理由をつけて人々をだまそうともくろんでいる"俳優"たちに気をつけなければいけないとアダムスキ氏は幾度も警告してきました。一婦人がこのような偽りの印象にすっかりだまされて、宇宙人が彼女に長いあいだ断食をせよと教えたのだと思い込み、その結果彼女は東部の病院で死んだという例があります。宇宙人がこんなことをとなえているということを信じさせるためには、人々を完全に盲目にしておく必要があるでしょう。あまりに多くの人が傷つけられているので私は（注。ハニー氏は）これ以上だまっているわけにはゆきません。まじめではあるけれども自分たちは真実のスペイス・ピープル（注。宇宙人）と接触しているのだと思い込んでいて愚ろうされている人々にたいして私はたたかいを宣することにします。大抵の人は彼らが大衆をあざむいているのだということに気づいていないのだと私は思います。次に実例をあげることにしましょう。

最近ケァリフォーニア州のある人が黒い服を着た三人の男にとり巻かれて、きわめて内緒じみた態度で「実はモンカという名の邪悪な火星人があなたをねらっているので、自分たちはあなたを保護するために火星から派遣されて来たものである。モンカはあなたを殺そうとしているので、われわれはそれを防ぐために送られて来た遊星間巡察警官である」と耳打ちしたのです。

黒服の三人連れのなかのリーダーらしき男を見て本人が気づいたのは、相手の目が奇妙な目付きをしているということでした。両眼がまるで光線を放っているようで、見つめられた本人は自分の体内まで見透かされるように感じたのです。三人連れの男は熟達した催眠術師なのであって、やがて本人を術にかけてしまい、意のままにあやつられるような状態にしてしまいました。

こうして催眠術によって本人が相手の意のままの状態になるとたちまち相手は前記の話の内容をがらりと変えて、おどし文句をならべたてて本人とその奥さんを脅迫し始めました。彼らがいうには、もしいわれたとおりにしなければ本人もその奥さんも程度の低い遊星へ連れて行って再び帰れないようにしてやるといいます。混乱した精神状態におちいった本人は相手の三人組がたしかにほんものの遊星人だと思い、すつかりおびえてしまいました。帰宅して奥さんが三人組の一人に連れ去られたのを発見して、ふるえあがって生きた心地もしなくなり、ついに私のところへ（注ハニー氏のところへ）助けを求めて来ました。その結果、本人は真実のスペイス・ピープルはこの事件には関係がないことを知ったのでした。

このような事件のすべてには一つの動機が存在しなければなり

ません。右の場合は金でした。私の友人が静電装置に関する特許を二件ほどもっていましたが、これを右の三人組がだまし取ろうとしたのです。そこで警官の出動となってただちに詐取が防がれたことがあります。〝サイレンス・グループ〟の手先となっているこうした連中を公然と制すべきときが来たと私に感じさせるようになったのはこの事件からです。

金以外の別な動機もあります。もし一個人がこんないかがわしいグループの存在にとって邪魔になってくれば、本人はさまざまの手段で防害を受けます。また、もしだれかが円盤問題の真相にくわしくなり、円盤の存在を多数の人に知らせて、飛来する理由などを伝え始めると、〝サイレンス・グループ〟は本人を沈黙させるかまたは活動を中止させようとしたりします。ベンダーの著書に述べられている事件例は右のグループによって応用される策略の典形的なものです。

私が最初に円盤研究を始めたシアトルの円盤研究団体もこれに似たような経験をしたことがあります。私の一友人がおそく仕事から帰ったときのことです。彼は疲れていました。居間へ入ったとき、ふいにそれまで感じたことのない〝ゾッとするような恐怖〟を感じました。どうしてもその感じを消すことができないため、散歩しようと外へ出て、再び部屋へ入ったときに彼はだれかの手が肩にさわるのを感じたのです。しかしその部屋には他に人はいませんでした。そこで彼は安楽イスに坐りました。すると突然部屋のまんなかに一人の人影が出現し始めるのを見たのです。しかしその人影は次第に消えていって見えなくなったというのです。

これとちがう体験をした人もあります。たとえば人影はないのにベッドの上にあたかもだれかが腰かけているかの如く一部分がへこんでいるとか、だれもいないのに人が室内を歩いたかのように敷物を踏んだ足跡があったとか、室内にだれもいないのに人の気配が感じられて、その息づかいの音まで聞き、または悪臭がただよったというような体験例もあります。

ベンダーの場合も彼みずから各種の事件に出くわしていて、宇宙人と自称するペテン師と面と向かって会ったこともあるのですが、結局何事もおこらなかったという実例があります。こうしたことは他の多くの人も経験しているのです。ベンダー氏よりももっとひどい例になると、人影はないのに声を聞くという体験によって自殺にまで追いやられた人もいます。また自制心を失ってあげくのはてに精神病院へ入れられるか、狂人の一歩手前にまで来る人もあります。

人影がないのに声を聞く人たちはペテン師のぎせい者であり、心は全然安定していません。あるとき一婦人が「アダムスキの書物とハニーのニューズレターを焼き捨ててしまえ」という声を聞き続けたことがあります。彼女はそのとおりにしました。ところがなおもその声が聞こえ続けたので彼女は私の援助を求めてきました。私が事の真相を少し説明して防禦法を話してから事態はただちに好転して現在はうまくいっています。

アダムスキ氏の著書や文献が一般大衆の信念に影響を与えないようにしようとして、反対勢力はきわめて強力になっています。彼らは大衆の心を支配するために全力をあげての戦いをもくろんでいますが、すべて真相をわからせないようにするためにすさまじい努力が払われているのです。超自然的な物事や幽霊を信じて

いて、心霊現象がその証拠であると考えている人たちは、犠牲者になりがちです。そうした現象が自分の考えを説明していると思っているからです。

大抵の人が信じているような超自然的な物事は実際には存在しません。ＥＳＰ（注。超感覚的知覚作用または霊感の略語）という言葉は誤った名称です。なぜなら発生する物事は人体の感覚系統の範囲内であるからです。私はこの問題を信ずる人をおもしろ半分にやっつけようというのではありません。読者が真相を知られれば、同じような奇怪な現象が身辺でおこった場合、自分の知識でもってうまく押し返すことができます。「真相はいったい何か」についてひとたび知識を得られれば恐怖すべき理由はなくなってしまいます。

もし読者のなかに奇妙な声を聞いたり、幽霊のようなものを見たり、悪臭をかいだり、いやな感じがおこったり、目に見えない何者かにつきまとわれて、しかも心はシャンとしている場合、その原因は何でしょうか。盲想なのでしょうか。それとも事実なのでしょうか。そんなことが事実としてありうるものでしょうか。あるとすれば何がそんな現象をひきおこすのでしょうか。以上の疑問にたいする解答を私はこの記載記事で追って載せることにします。一方、かつて私が発表した記事〝幽霊現象と霊界通信〟とアダムスキ氏の著書〝テレパシー〟を読みなおして下さい。

（注。〝幽霊現象と霊界通信〟は本誌一九六二年七月ー八月号に掲載しました）

第二部

第一部を発表してから私は多数の手紙を受けとりましたが、それには或る人々の心の混乱ぶりが述べてありました。これについてもハッキリさせる必要がありますので、第二部で完結する予定だったのを少し続けることにします。連載が終わるまでに第一部のしまいに提示された疑問に回答を与えましょう。

多くの場合、人々は円盤・宇宙人問題の知識を得るに先立って一時目に見えない力に支配されることがあります。この記事で述べる事柄は現在の円盤研究運動の到来とともに始まったというわけではありません。かかる目に見えない力の支配は、それが最もひどかったごろ教会から〝悪魔にとりつかれたのだ〟といわれていたのですが、これは昔からあったことです。それは円盤時代の夜明けとともに始まったのではないのです！　それではなぜ〝彼ら〟はそれをやったのでしょうか。たしかにこれは悪魔的な楽しみのためではなかったのです！

一婦人が次のような手紙をよこしました。「ベンダーの書物に深い感銘を受けたまじめな円盤研究グループを私は知っています。或る夕方そのグループの二、三名の人が円盤について語り合いながら坐っていたとき、彼らは突然室内に人影が現われるのを見ました。そのために居合わせた一紳士はたいへんおびえてしまってあえて家へ帰ろうとしませんでした。また別なメンバーが一人で歩いていたときベンダーの物語について考え続けていました。そしてあの物語は全くのデッチアゲなのだという結論に達したときあたりに何も見当らないのに突然腐ったタマゴのようなひどい悪臭をかいだということです。

第一部で述べましたように〝悪臭〟とか〝ゾッとするような感

じ“または”まるで背骨をそよ風が吹いているような感じ“とかその他目に見える原因がないのに発生する物事は、人々を支配して恐れさせるために心霊現象を応用している連中の日常の道具なのです。

この奇妙な物事のほんとうの原因は何か、どういうふうにしてそんな現象がつくり出されるのかを説明する前に、私はベンダーの書物に出てくる実例について話したいと思います。この実例には無数の種類があるのですが、こんぱち世界中でくり返し発生しています。

ベンダーが著書のなかでいっているところによりますと、まだ子供であったころ彼は迷信的な雰囲気のなかで育てられて、家族から超自然的な物語を聞かされました。これは明らかに彼の心に強い印象となって残り、著書に述べられてあるような事件にたいして彼は潜在意識的に受動的になりました。

彼のおこなった交霊実験会が円盤の乗員とコンタクトしようとして試みられたという事実において、右の証拠が存在しています。加うるに彼は自分の室内を気味のわるい心霊的な物で飾りたてましたが、これは神秘的な意味を帯びた品物で、室内へ入って来る人にある種の気分をおこさせるように作られたものでした。これらすべては、のちになって円盤問題に混乱をひきおこすために彼を利用した人々にとって絶好の土台になったのです。

しかしベンダーが自分でいっているように真相に近づいていたかどうかは疑問です。なぜなら彼の物語には何もこのことを裏書きするものはないからです。気味のわるい異常な出来事がまつわりついた神秘的な環境下にあることを彼がやめたならば、それは他の研究家にとってよき制動力になったでしょう。増大する混乱と真実を包むモヤはこよなく”暗躍グループ“を助けることになるのです。

ベンダーには不思議な電話がかかってくるようになりました。受話器を持ち上げると人の声ではなくて、「まるでテレパシーのようにメッセージを受けとるような気がした」というのです。彼は「奇妙な、断続的な、ブーンとうなるような音」を聞きました。するとそれは急にやみました。彼はドアーの下から入って来る青色の光線に気がつき、調べているうちに”形のハッキリしない一個の大きな物体“に気づいたというのです。

ところで、私の友人たちのなかには”光る物“が室内を飛びまわっているのを見て急にハッとしたという経験を一度ならずもっている人がいます。その”物“はやがて窓か壁のすき間から消えてゆくというわけです。なかにはそのために恐れてしまって円盤研究を中止したのもいました。

暗躍グループのカモになっている或るコンタクトマンたちは、自分たちが講演をやっているあいだに窓のまわりや会場のなかを光る球体が飛びまわるのを目撃することがあって、これはてっきり上空の円盤から放たれた偵察用円盤だと感違いしたりします。

ベンダーの体験の別な例では、彼は後頭部に脈動を感じて「自分の両足が地面から持ち上げられるような奇妙な感じがした」と述べています。通常この種の頭痛は頭部が脊柱とつながっているあたりに集中するか、またはひたいに近い両こめかみにおこるものです。奇妙な悪臭も（これは心霊術師によってきわめてしばしば用いられるのですが）ベンダーによって体験されました。とき

としてこれは腐ったタマゴ、または燃える硫黄のようなにおいだといわれています。この悪臭はあまりたびたび用いられるので、過去においては〝燃える地獄の火〟のにおいだといわれ、悪魔と結びつけて考えられました。

こうした小細工をろうする張本人に個人的に出会った場合、その犠牲者たちは相手のことを一様に同じような表現で説明しています。そして個々別々な事件と思われてもそこには一連のつながりがあることがわかります。すなわち相手の目は通常「暗い顔のなかに光っている小さな閃光電球のような奇妙な目である。その目は私を焼きつけるかのように思われた……私は頭のなかがグルグル廻るように感じ、映画のスクリーンがぼやけたような気がした。私は数度まばたきをしてから数秒間目を閉じた。目を開いてみると相手の男はいなかった。しかも立ち去る足音などは聞こえなかった。続いて私の左方の坐席をチラリと見たとき、そこに相手がいてあの目付きでなおも私を見ているのに気がついた。相手が私の右側にいたというのは私の考え違いだったのだろうか。そんなことはない！　私は発狂したのだろうか。あのおそろしく光る目は私の目をジッと見つめ続けたが、私は急に立ち上がって館内の別な坐席へ移動した」（ベンダーの著書より引用）

以上の体験のすべてはベンダーを好都合な気分にさせるための大きな道具立の一部でした。連中がベンダーを精神的に意のままにすることができるように、必要な精神状態に仕向けるわけです。適当な時期が来たとき、ベンダーは全身にゾッとするような寒気を感じましたし、頭痛がし始め、奇妙な悪臭をふたたびかぐようになりました。そして彼は意識を部分的に失いました。すると青い光が脳中をチラつき始めて、自分がまるで雲の上をただよっているように感じました。ズキズキするような痛みがこめかみにおこってきて、目のすぐ上のひたいの部分が〝ふくれ上がった〟ように感じられたのです。

目を開くとベンダーは自分が肉体から脱け出て空間にただよっているような〝気がした〟のですが、その肉体をしかもベッドに横たわったままで見ることができるような〝気がした〟のでした。すると彼の〝宇宙の神秘の探求〟をやめるようにという声を聞き始めました。これも他の多くの似たような事件の代表的な例だといえます。その後ベンダーは床の上の空間をただよっている人影を目撃しました。その人影（複数）は黒い服を着ていて、きわめて神秘的に行動しているように見えました。人影がいうには、彼らは地球人を〝さらって〟行き、その肉体を彼らの目的のために使用するのだというのです。かかる体験のどれもベンダーをもうろうとした精神状態にしてしまいましたが、また体験がおこるたびにズキズキする頭痛と各種の〝幻〟がつきまとっています。

彼は他にも多くの体験をもちましたが、そのいずれも結局は或る人間たちが実際には芝居を演じているのだということをベンダーに確信させるようになりました。各種の化学研究所や〝精巧な宇宙船〟を用いて、彼らはベンダーが円盤に乗ったかのように思い込ませたり、このニセ宇宙人の基地が地球の内部に存在するかのように思わせていたのです。宇宙や他の遊星に関してベンダーが彼らから得た回答は完全にバカげていましたが、ベンダーの精神状態においてはそれを真実なものと思ったわけです。

これと同じ事件がニュージーランドで発生しました（注。いわ

ゆるX氏事件）。そこではバカらしいことが真実なものとして受け入れられました。こうしたニセ宇宙人の影響下にある人々は正常な推理力に基づいていないのであって、真実に似た物事にたいして明らかに盲目になっています。

今週私はヨーロッパから次のような手紙を受けとりました。

「私たちのテレパシー受信者が三機の円盤が編隊を組んで飛ぶ写真を撮影しました。その編隊は見事な一直線をなしていて、定規をあてることができるほどです。私たちは始めそれをインチキだと思いましたが、前記の受信者が急にテレパシーによる印象を感受したのです。すなわち『あなたがたがどんなふうに考えようとも、われわれ宇宙人はあのようなすばらしい編隊を組むことができる。先頭を飛ぶリーダーはあとの二機のために磁場を放っているので、あとの二機はその磁場に合わせて適当な距離を保つこと以外に何もすることはない。リーダーが方向をきめるとそのたびに後続機が正確にそのあとを進行するのだ。その写真は真正なものである』という声を聞いたのです」

この手紙の次の節にはこのようにも書いてあります。「アステロイド帯について尋ねたら、テレパシーによつて新しい事実がわかり始めました。その回答はこれこれしかじかです……」

このことは私とアダムスキ氏とがこれまでに何度となく警告してきた事柄にまさにあてはまります。右のテレパシーによる回答は真実の宇宙人から送られたのではありません。回答の内容が正しかったとしてもそれは〝受信者〟自身の心から発したものにすぎません。かかるテレパシックな印象は確証の機会が存在しないかぎりは意味のないものです。たとえ正しいと確証されるとしても、それは宇宙人から送られたメッセージではありません。このようなメッセージは霊媒によって受信されるものと異なるところはありません。真実なものとして頼ることはできないのです。まじめにとりあげるとトラブルをひきおこすことがあります。

右にあげたメッセージのようなものがベンダーや他の多くの人にトラブルをおこさせたのです。（未完）

質疑応答

C・A・ハニー

〔質問一〕 ベンダー氏の著書〝空飛ぶ円盤と三人の男〟の内容は事実にもとづいたものですか。あなたがこの本をおすすめにならなければ私は買わないことにしますが——。（ケァリフォーニア州、M・V）

〔答〕 私はこの本を読みました。そのなかには多数の人に実際におこった出来事が述べてあります。これに似たような体験をもって私のところへやって来た人たちと私は会っています。かかる出来事の背後にひそむ事実をお伝えするのに今は機が熟しているように思われますので、私は連載記事を書く予定で、それによって真相と三人組の行為の目的などを説明するつもりです。ベンダー氏によって述べられている各種の事件は真実のスペイス・ピープル（注。宇宙人）によってひきおこされたのでもなければ、是認されているのでもありません。ベンダー氏が聞いた話の多くは或る特殊な目的を遂行するために語られたウソであったわけです。

（注。ベンダー著の右の書物を編者はまだ読んでいませんがこれは横行するニセ宇宙人の暗躍や霊的コンタクトとそれによって実際に被害をこうむった人たちの体験例が述べてある書物のように見受けられます）こうした出来事はいわゆる〝サイレンス・グループ〟か、または真実のスペイス・ピープルによっておこなわれている知識活動に激しく反対している連中の公然たる団体によって仕組まれているのです。

かかる出来事は一つの目的に役立っています。すなわち、それは混乱をひろがらせて、人々を全く正道からはずれさせるためにでっちあげられた多くのナンセンスをまきちらして真相をかくすのに役立っているのです。あまりに多くの人がニセ宇宙人やサイレンス・グループのインチキな行為を体験していますので、こうした出来事は次第に確定的となり、人々はそれを真実なことだと思うようになっています。これに関しては別な記事を載せますからそれをお読み下さい。

何かの問題について何かの書物から有益な記事を見いだすことはできますから、どんなものを読みなさいとか、読んではならないとかいったことを私が判定するわけにはゆきません。ベンダー氏の著書でもその背後にひそむ事実が知られるようになるというのであればその書は有益となるでしょう。その書は避けるべき落とし穴について警告しているからです。（その著書の中に述べてある各種の事件は心霊的な事物の信奉者によってひきおこされたものです）それゆえ、円盤研究を志す人はコンタクト例のすべてを自分で検討して、物語の内容に関して機敏な判断力を養うように努力しなければなりません。

〈質問二〉　スペイス・ピープル（他の遊星の住民）の肉体はこの地球へ来た場合ももとの遊星上にいるときと同じ形をしているのですか。地球へ来たときは肉体の形を変えるのですか。（テキサス洲、コレット・フリシュキー）

〈答〉　心霊的なコンタクト例から流される誤った情報によって多数の人は他の遊星の住民は地球人のような肉体をもっていないのだと思っています。つまりスペイス・ピープルが地球へ来るときは霊魂のままで来て、こちらへ来てからは地球人の肉体のような姿に変化する（かまたは肉体を借用する）と思っているのです。これは真実ではありません。

この太陽系内の高度に進化した遊星から住民が地球へ来るときは、もとの遊星にいるときと同じ肉体のままで来ます。人間の進化というものは〝魂〟または〝真実の自我〟と関係があるだけで肉体とは関係ありません。

われわれはだれでも飛行機に乗って世界のどの国へでも行くことができます。しかもあたりまえの肉体のままでそれをおこないます。これと全く同じことが近隣の遊星から地球へやって来る人たちにもあてはまるのです。

〈質問三〉　アダムスキ氏はその後も本を書いているかどうかお知らせ下さい。（カナダ、モントリオール、B・R）

〈答〉　アダムスキ氏は目下新たに書物を執筆中です。出版されたならばニュースレターにその旨を載せます。

〈質問四〉　〝空飛ぶ円盤同乗記〟の百七十五頁に（注。邦訳版百四十頁）ファーコンが一九五三年にゲアリフォーニア洲ブラッシュ・クリークで発生した事件について「あの光景は実際の出来

事です。もっとも、あの宇宙機と乗員は私たちのグループではなかったのですが——」といっています。いったい何種類くらいの宇宙人のグループがいるのですか。そしてどのグループも他のグループすべての存在と活動を知っているのでしょうか。（アーカンソー州、L・F）

〔答〕 私がこれまでに聞いたところでは六種類の異なるグループがいるのですが、たぶんもっと多くのグループが存在すると思われます。宇宙人の各グループは他のグループが地球へ来ていることを知っていますけれども、他のグループがおこなっている活動を必ずしも知ってはいません。その方が全面的な計画にたいして安全となるからです。

〔質問五〕 次の質問はだれもが興味をもつと思いますので、お答え下さればさいわいと存じます。イエスはなぜ「人間は父母を憎まなければ自分の弟子になることはできない」といったのですか（注。ルカによる福音書第十四章二十六節）。なぜイエスは憎しみの教えを説いたのですか。私はこのことを一牧師に話しましたが彼はたいそう困ってしまいました。実はその牧師は私が最初に尋ねた問題をもち出したことで私にたいして怒ったのです。

アダムスキ氏の〝空飛ぶ円盤同乗記〟にイエスはもと金星から来たと述べてあります。サタン（悪魔）も金星から来たのでしょうか。サタンの別名はルシファーです。そして昔の人は金星をルシファーと呼んでいたのですが——。

イエスの誕生は十二月ということになっていて、一般人はそれをクリスマスとして祝いますが、実際には十二月ではないという事実が発見されています。どうして十二月ということになったのですか。（シアトル、リチャード・オグデン）

〔答〕 或る言語で表現された或る概念を別な言葉でもって全く同じ意味に翻訳することは殆ど不可能に近いということをまずご記憶下さい。聖書の内容が大部分翻訳された時代において、それをおこなった学者たちは、実際にはイエスの時代に存在した真の状況について何も知らなかったのです。加うるに、学者たちが聖書について知っていた唯一の事柄は、学者たちの時代の教会によって説かれた教義だけでした。したがって彼らは教会から提出された概念にしたがわねばならず、また自身の概念を検討したり形成したりすることは許されなかったのです。

正しく訳された文章によれば、「人は本人の全家族を含む他のすべてのものの上に自分の（イエスの）教えをおかなければ、自分の教えの真実の信奉者にはなれない」とイエスがいっていることがわかるでしょう。これは盗人にむかって「監獄へ入らないで済む唯一の方法は盗みをやめることだ」と教えてやるのに似ています。まず正直というものがあらわれねばなりません。もし〝憎しみ〟が正しい訳だとしますと、その言葉は今日の意味よりも二、三百年前は全く異なる意味をもっていたということになります。

私の考えでは、サタンと呼ばれる者はイエスのようには肉体をもって存在していないと思います。つまりサタンとして表現される一つの力が世界に存在しているのですが、発生しようとしている混乱を少なくするために私は別の名称を用いることを好んでいます。ルシファーまたはサタンという名は、人間の肉体の感覚器官の心（センス・マインド）をあらわすために、アダムスキ氏によって象徴的に用いられています。世界に存在するこの望ましく

ない力は、万人のセンス・マインドのなかに見いだされる望ましくない部分すべての集合体（または総計）です。

”同じ羽毛の鳥はおのずから一ヵ所に集まる“（注。類は類をもって集まる）のと同様に、望ましくない想念群は一つの巨大な貯水池を作るために集結しているのであって、その貯水池には高度の知識と理解のレヴェルに達していない人によって吐け口が取り付けられています。そしてこれが今日見られる人間の不幸の水源地であり、多くの心霊実験会や霊的なコンタクトから流されるナンセンスの源泉です。アダムスキ氏の著書”テレパシー“にはこのことについてもっと詳細に述べてあります。

イエスの誕生日の十二月説に関するご質問については、別掲記事”現代の宗教の起源“でいずれお答えすることにします。十二月二十五日というのは例の太陽神（ニムロッド―バール）の誕生を祝う異教徒の祝祭日であったということ、そして旧約聖書にはこれが神にたいする嫌悪のあらわれだと述べてあることがおわかりになるでしょう。エレミヤ書第十章の一節から六節にかけて古代に用いられたクリスマス・トゥリーのことが記してあります。

イエスの誕生日については全く不明なのですが、たぶん八月下旬か九月上旬に生れた形跡を示す証拠が存在しています。これはユダヤ人のすぎこしの祝いよりも約六ヵ月後です。とにかく秋の始めごろなのであって、冬のことではありません。

現代の宗教の起源

C・A・ハニー

第五部　クリスマスのおこり

私は多くの儀式の起源に関する事実を報告するだけであって、いかなる宗教や教会をも攻撃するものではないということを今一度述べたいと思います。結局、かかる儀式類のすべては排除されることになるかもしれませんし、世界の大宗教の背後にある本来の基本的な”真理“は変わることはないでしょう。

宗教上の慣習がどのようにして存在するようになったかということを調べるのだからといって、私は他人の信仰を危うくしようというわけではありません。読者のキリスト教の信仰がいったいどうしてクリスマス・トゥリーや復活祭の日の出の礼拝と関係をもつようになったかご存じですか。（注。復活祭には日の出を拝むが、そのとき無言のまま川から汲んできた水は人間に美と健康とをもたらし特に眼病によくきくといわれている）

人間は「なぜ」或る物事を信ずるのかという理由を知る必要があると私は思います。たしかに盲目的に物事を信じて満足はできません。

クリスマスという言葉は西暦二二〇年に教会（東方、すなわちギリシャ正教会）によって制定された”クリスト・マス“のなまった形です。西部教会（ローマ・カトリック）はそれよりも約百年おくれてそれを祝い始めました。十二月二十五日という日付は

三八〇年ごろに採用されたものです。それ以前には一月六日が一般に祝われていて、地方の教会で四世紀の終わりごろまでこの日を祝い続けていたのもあります。

聖書からだけでもイエスが冬至に生まれたのでないことがわかります。ルカによる福音書第二章八節に羊の群れが夜羊飼いたちによって番をされていた（ということは羊がその土地の草を食っていたことになる）と述べてあります。このことは十月ごろにその地方で始まる冷たい雨季以前にイエスの誕生があったことを決定的に示しています。（注。この羊飼いたちは天空に出現した不思議な人物からイエスの誕生を知らされた）

アダム・クラークの注釈書（第五巻）には次のように述べてあります。

「その当時、羊たちは野外にいた。羊飼いは昼夜羊の番をした。最初の雨はマーチェスヴァンの月の始めに始まったが、これは現在の十月と十一月の一部に一致するので、羊は夏中ずっと野外に放たれていたことがわかる。そして、この羊飼いたちはまだ羊を家へ連れて帰っていなかったので、十月はまだ始まっていなかったこと、それからしてイエスは羊たちが野原に出ていなかった十二月二十五日に生まれたのでもなければ、羊がまだ野原にいた九月以降に生まれるはずがないことも推定できるのである。牧草地で夜中に羊を飼ったことは年代学的な事実である」

旧約聖書は使徒たちに異教徒の習慣にしたがって神を礼拝してはならないと教えましたので、彼らがイエスの誕生を記録するのを重視しなかったことは当然です。

カトリック百科辞典には「カトリック教会の昔の祝祭日にクリスマスというものはなかった。これは最初エジプトから入ってきたものである」とあります。また「一月一日に集中する異教徒の習慣はクリスマスに引かれた」「聖書には、聖人でなく罪人だけが彼らの誕生を祝った」とあります。

大英百科から引用しますと次のような個所があります。クリスマス（すなわちキリストのミサ）は教会の初期の祝祭日として採用されてはいなかった」

アメリカ百科辞典には「キリスト教会のおこった最初の百年間はクリスマスはおこなわれなかった。一般にキリスト教徒の慣例として偉人の誕生よりもむしろその死をいたむことになっていたからである」と述べてあり、また次のようにも記してあります。

「四世紀にこの出来事（キリストの降誕）を記念して祝いがおこなわれるようになった。五世紀に西部教会が、ソル（太陽神）の誕生を祝う古代ローマの祝祭日にキリストを祝うベンと布令を出した。これはキリストの誕生日に関する確実な知識がなかったためである」

エジプトにおいては〝天の女神〟ととなえられたイシスの息子が冬至に生まれました。旧約聖書に述べられている太陽神バールの誕生も同じ時期となっています。バビロニアでも太陽神がこれと同じ時期に生まれたといわれていました。これはその冬至から太陽が次第に長く空にとどまり始めて、再生したのだといわれたからです。

ユルというのはバビロニア人の言葉であって〝幼児〟を意味しますが、これもキリスト教以前のユルの日すなわちクリスマスの起源を証明しています。古代のアングロサクソン人は、キリスト

教に接するよりもだいぶ以前に、十二月二十五日とその前夜を"ユルの日、及び聖母の夜"と呼んでいます。（シェイロン・ターナー著"アングロサクソン人"第一巻より）

古代ローマ人は三月二十五日にバビロニア人の救世主の母であるシベレを記念して、一年に一度の祝いをもよおしました。これはバビロニア人とアッシリア人の地方でおこなわれていた類似の祭日から直接にローマ人の方へ流れ込んだ習慣です。

ヒスロップの"二つのバビロン"に次のような個所が見られます。「聖母マリアの日とクリスマスの日とはたがいに密接な関係にあることは明らかである。三月二十五日と十二月二十五日の間にはちょうど九ヵ月ある。そこで、もしニセモノの救世主が三月に体内にはらまれて十月に生まれたとして、ホンモノの救世主のみごもりと誕生が月ばかりか日付まで正確に一致しているとはまるでおかしいではないか。それゆえ、聖母マリアの日とクリスマスの日とは全くバビロニアにあったものである」

キリスト教で祝われる最も重要な祝祭日のうちで、五つは直接にバビロニアの起源にまでさかのぼることができます。クリスマス、聖母マリアの祝い日（注。三月二十五日。特にこれはみごもりの御告げ祝い日をいう）、復活祭、洗礼のヨハネ誕生祭（注。六月二十四日）、聖母被昇天祭（注。八月十五日）です。六月二十四日は古代バビロニアにおいてベルすなわちタムズの礼拝として祝われました。奇妙なのは、ベルータムズの別名はオアネスというのですが、これが洗礼のヨハネの本名であるヨハネスと殆ど一致しているということです。この祝いは現在と同様に古代にも前夜から始められていました。ドルイド教団員（注。キリスト教に改宗しない以前の古代ケルト族の宗教団体員）もその神バールを記念して同じ日を祝祭日にしています。（未完）

（二十三頁より続く）

をそろえて下さい。そしてこれらを勉強されれば、将来にそなえて必要な広い基礎を読者はまもなく得ることになるでしょう。もし私からこの目録中の書籍を購入されることを望まれる場合は喜んで心配いたしましょう。それはGAPの支持に役立つからです。目録中の書籍について私はわざとポケット版を選びましたが、これはだれにも容易に買える価格であるからです。

特に私は次の二冊の書物をおすすめしたいと思います。トーマス・ペイン著"理性の時代"及びチャールズ・フランシス・ポター博士著"イエスの謎"です。後者には"死海の巻き物"から引用された最新の啓示が述べてあります。

これから先、このニューズレターや私が始めようと計画している通信講座に掲載されるテレパシーと宇宙の法則を理解する前に読者は磁気と電気の基礎的な知識を身につけておく必要があります。今や怠け暮らすことはやめてジックリと落ち着いて研究にとりかかるべき時期が来ています。宇宙のブラザーズと地球のロケットの両方からもたらされる新しい知識がまもなく目前に現われようとしています。われわれはそれを理解して応用するように準備しなければなりません。

ひとたび世間の人々が物事の真相に気づき始めるならば、彼らは科学的な事実を望むでしょう。自分勝手な判断、霊界通信、空想などによって行なわれる報告を望んだりはしないでしょう。

デスモンド・レズリーからの手紙

最も厳格なローマカトリック教徒として育てられた者の一人として、私はあなたのシル神父との応酬を興味をもってみてきました。（注。シル神父はマサチューセッツ州ローレンスの人。アダムスキ氏の哲学を否定し、証拠物件を出せと要求して、GAPに真っ向から対立している）シル神父はこの宇宙に多くの人類が生存するという考えに同調しようと最善をつくしておられますので大いに激励を与えられるべき人です。私には聖職にある友人が多数ありますが、彼らは Flying Saucers Have Landed（注。"空飛ぶ円盤実見記"アダムスキ、レズリー共著）が最初に出版されたときにはその内容をのみ込むのに少々困難を感じたけれども、その後よく考えた結果、その著書が彼ら聖職者の信奉している教義を根本的にひっくり返すものではないことに気づきました（注。結局同じ宇宙の法則を述べたものであるの意）。故ピウス法王が"アダムの堕落"は純粋に地上の出来事であったこと、他の遊星の住民は原罪をのがれているにちがいないということ、そして肉体的にも精神的にも地球人よりもはるかに進化しているであろうということなどを述べている事実をシル神父が思いおこされるならば、それは神父にとって役立つであろうと思います。ただ神父にとっての障害点は"生まれかわり説"であるように見受けられます。

シル神父は自分の教会のドグマのいずれにたいしても"物的証拠"を与えることができないことを忘れて"物的証拠"を要求するという誤ちをおかしています。神を信ずるか信じないか、カトリックの絶対性、聖書の解釈を信ずるか信じないか、文字による人間は一回だけの生涯なのかそれとも多くの生涯をくり返すのかといった事柄は物的に証明されるものではありません。もしそれらが物的に証明できるものならば小学校の理科の時間に教えられるでしょう。右の事柄に関する知識は二つの方法によって得られます。一つは"頭の学び"すなわち書物または他人の意見や主張などを通じて得られるのであり、一つは"魂の学び"によって得られます。後者が一そうたしかなのですけれども、これを達成するにはよけいな困難が伴います。後者はたえず頭のおしゃべりによって反ばくされています。ですからわれわれが自身の内部の"無言の声"に耳をかたむけることを学んだり、既成概念、ドグマ、偏見などで頭をこり固まらせたりせず、おしゃべりをやめたりするならば、その"声"を聞くことができるでしょう。

"頭の学び"がいかに価値があろうとも、それが私の"魂の記憶"、あの小さな絶対的な声、前世において得た知識の眠っている記憶——横から口を出すことが許されるならば、これらはあらゆる説やドグマの妥当性を自分に知らしめるものであるといえるでしょう——に対抗してくるのを私がくい止めることができないかぎり、私はその"頭の学び"を見いだすことをやめることにしています。

"ブラザーズ"の教えは受け入れられるべきものです。なぜならそれは一群の偉大な哲人や賢人の教えに一致するからです。こ

の偉人たちはあらゆる時代を通じて宇宙の法則を保ってきた人たちであって、彼らが助けようとした比較的単純な〝子供たち〟にとって有益であると考えられただけの教えを、その都度世界にわかち与えた人々です。これはこの教えに接してきた人の〝魂の記憶〟と一致します。その内容は自我のもつ誤りによって少しづつ異なるかもしれません。しかし〝ブラザーズ〟の一人によってきわめて美しく述べられた基本的な教え、すなわち「私たちは創造者のもとに生きていますが、あなたがたは創造者について語っているだけです」というのは同じです。

私はシル神父に心から同情します。私自身も彼のもつ障害のすべてを通り抜けてきたからです。始めに私は魂の学びに強く対抗しようとするドグマ（頭の学び）を見いだしました。そこであらゆる物事から私の心を取り払うようにして、私の教師（魂の声）に話させるように努力したのです——それはやがて話しかけるようになりましたが——、それで私としては決してバラバラになって失われることのない断片を充分に集めてきたと考えたいわけです。

われわれが今日のオーソドックスな宗教をサナギを保護するマユまたは赤ん坊を包む巻き布と考えるならば、それは役に立つでしょう。マユをもたないサナギは死ぬかもしれません。しかしサナギの羽根が伸びてくるとサナギはみずからマユを破って外へ出る必要があります。さもないと、かつてのサナギの宿であり保護器であったマユがサナギを殺すことになります。サナギがマユを押し破って自分の羽根が伸びているのを見いだすまでは飛ぶことはできません。エジプトのあの栄光ある翼をつけた球体の象徴を比較してみて下さい。この象徴はあらゆる妄想からみずからを解放した自由な魂を表わしたものです。

カトリック——漁夫の教会——は、双魚宮の陰惨な困難な二千年——無知、暗黒、残酷さなどが今日よりもはるかにひどかった時代——を通じて西欧のヒューマニティーを獲得するためにつくられました。それは、壮大な拷問劇に熱中したローマの堕落した蛮人から今日の大部分の西洋人のように適度に親切な人間へと人類を教育するのに成功しています。（スペインと宗教裁判のように恐ろしい例外はありましたが——）。それは長いあいだ失われていた一つの教義を再び導き入れて、他の何にもまして〝愛〟の教えを強調しています。「汝自身の如く隣人を愛せよ」とそれは説き、多くの人はそれを心にとどめました。しかしきわめて短期間に、しかもおそろしく困難な条件のもとにくわしく述べることは不可能でした。ただ一つの簡単な教えだけが基本的なものであり、その時代に適応した教えが示されました。

不幸にしてそれは二つの大きな真理、すなわちカルマの法則と生まれかわりの法則を葬り去ってしまいました。しかし私はこれが何か悪い目的のためになされたのだとは思いません。生まれかわりに関する教えは全くすたれてしまっていたのです。インドをごらんなさい。そこでは人々は座り込んで満足し、何もしないでいて、「自分はまだ数百回の生まれかわりをするのだ。何を心配することがあろうか」といったりしています。キリスト教は、人間が生まれかわりを信じようが信じまいが人間の未来はこの世をいかに生きるかできまるので、〝今〟が大切であるということを強調しようとしました。

生まれかわりの問題は一八七〇年のヴァティカン会議の議題でしたが、それが決議されないうちに会議は解散しましたので（これは普仏戦争のためです）この議題は全然討論されなかったのです。たぶんこれはよいことだったといえるでしょう。当時の風潮のなかではおそらく否決されたと思われるからです。

一個人または自我としての私デスモンド・レズリーが肉体人間として死ぬべき存在であると説くのは正しいことです。その肉体はこの地上またはどこかで再生はしないでしょう。しかし霊魂、すなわち真の私は、いつかこの地上かまたは別な遊星で肉体の衣をまとうかもしれません。そしてデスモンド・レズリーによって得られた体験のすべてを持ち運び、それを新生児の個我と魂の記憶のなかに書きとどめるでしょう。

依然として疑惑につつまれていながらも、古いドグマに困っている人は目覚め始めている人です。そのサナギは自身のマユのなかで胎動しています。大きな誤りはせっかちにそのマユを脱ぎ捨てることか、または脱皮という価値ある仕事がなされた後に、そのマユをサギ師としてののしることにあります。われわれがドグマから脱皮したとき、われわれを乳離れさせてくれた年老いた母なる教会を不親切に扱ってはなりません。むしろ教会を助けて各自が自分自身の道を見いだすように教会の信者を援助する必要があります。生まれかわり説について一言申しますと、それは人間の魂が知っているか、または知っていない何物かであるといえましょう。それは宗教的な信仰と同様に教えたり証明したりすることのできないものなのです。

われわれが前世を生きたことがないというのが真実であるとするならば、カルヴィンの説いた〝宿命〟というあの恐ろしい教えは論理的には正しいということになります。生まれかわりというものがないとすれば、罪に満ちた環境のなかに生まれ出る幼児、または幼いときから売春婦になれと教えられてきた少女が、どうしてパラダイスに到達することができるでしょう。それができないということになれば、カルヴィンがいったように、呪われなかった幸運な人々を引き立たせるために一部の人たちはよけいに呪われるというのが神の意志であったということになります！　なんという恐ろしいこじつけでしょう！　人間がただ一度だけの生涯を生きてそれを終了するのであるとすれば、他の何を信じることができるでしょうか。宇宙を見わたしてみるならば、人間は完全な秩序と運動と何物をも浪費しない完全な組織とを見いだします。カルマというものを知らない例として再び引用しますと、オーガスティンは洗礼を受けない子供はリンボ（注。地獄の辺土）と呼ばれる場所で永遠にさまようのであると教えました。創造者の組織のなかでいったいどこにこんな馬鹿げた場所があるでしょう。神は正気なのです。驚くほどに、またすばらしく、しかも無限に正気なのです。神について語っているだけで、みずからの頭を検査される必要のある者、そして問題を混乱させることによって神に仕返しをする者、それは地球の人間です。

しかし私は年老いたなつかしい巻き布と母とを攻撃する気持ちはありません。彼女は私を助けてくれて、金では買えない多くの貴重な物事を教えてくれました。彼女もまた生まれかわることになるのです。なぜならば、今や双魚宮の時代は終わり、宇宙（宝瓶宮の）時代がさしせまっているので、〝世界の教師〟が再び出

現しようとしているからです。今世紀が終わるまでに、科学、心理学、宗教などを満足させ、混乱をしずめて、人間の真実の理解を通じて新しくより幸福な生き方を人間に与えるところの一つの新しい世界（哲学）の誕生を人間は見るであろうということが星座のなかに記されています。いいかえれば「神の国が天になるように地にもなる」ことが実現し始めるでしょう。

シル師のような多数の善良にしてオーソドックスな教師たちはこれが実現する前に（この地球がそうであるように）魂の危機を通過しようとしています。しかしそれは実現するでしょう。そしてあらゆる世界において人類の真実の兄弟愛が事実となるでしょう。

この魂の危機は長い年月を通じて世のなかに罪悪、狂気、邪悪などをふやすようにみえるかもしれません。これはできものに塗られるパップ剤（注。ノリ状のあん法薬）に似ています。あらゆる害毒を除いて遊星を清浄するためには毒物を一時激烈にする必要があるのです。

多くの人は落伍して破滅するかもしれません。急な坂を昇りつめることはできないでしょう。しかしこれは精神の未熟さのためであって、彼らはまた他のどこかへ送られるでしょうが、それは懲罰の神を喜ばせるために永遠の拷問部屋へ送られるのではありません。

われわれが今なさねばならないことは、ドグマについて論議する（神について語る）時間を浪費しないようにすることです。そんなことは全く重要ではありません。われわれは他の遊星の人々がやっているように、イエスが最高にやったように創造者（神）のもとに生きる必要があります。イエスは彼が神の子であることを示しました。また彼はわれわれ人間のなかに神性がひそんでいることを教えようとして、そのために死に至らしめられました。

今出現している〝宇宙時代〟は無数の人々の目を開かせるでしょう。そして人々も〝父〟を、あなたの〝父〟を、私の〝父〟を見いだすでしょう。そして、どこかの遠い天空のなかではなく、〝自分自身〟のなかに見いだすでしょう。

一九六二年十月十四日、ロンドンにて

デスモンド・レズリー

GAP本部の近況

C・A・ハニー

一九六三年には多くの新しい物事が展開しようとしています。これは興味あるニュースが世界の科学者から大衆へもたらされる年です。それはまたこのケァリフォーニア州に二つの変化があることを伝えています。

まず第一に、私はこのニューズレター（注。ハニー氏のコズミック・サイエンス・ニューズレター）を〝サイエンス・パブリケイションズ・ニューズレター〟と改称しました。この新しい題号はニューズレターの科学的な立場をあらわしていますが、内容は従来のエセンシャルな型を続けてゆきます。

アダムスキ氏は本誌を通じてかつて声明した諸計画を変更しました。そしてケァリフォーニア州ヴィスタの新居に落ち着いています。氏はまたこれまでの"コズミック・サイエンス"という団体名のかわりに新名称として"サイエンス・オブ・ライフ"を採用しました。前記の氏の居宅において毎日曜日午後一時三十分から四時まで講演会が開かれることになっています。聴講料は任意の寄付によります。

"空飛ぶ円盤の真相"の結語で述べられているように、将来は二つの分野、すなわち哲学と科学技術の両面の研究が促進されることになっていて、アダムスキ氏は前述のとおり自身で学んだ哲学を教えることになっています。私は（注。ハニー氏は）科学技術の面に力をそそぐことになり、ブラザーズ及び科学界からもたらされる最新の情報を本誌を通じて提供する予定です。

先号のニューズレター（注。ハニー氏のニューズレター一月号）にペイジの数字の誤りがあったこと、及び本号（注。右の二月号）に印刷不鮮明な個所があったことをお詫び致します。このごろ私の使用する機械に故障があって、何かの見えない力が私が心霊上のサギ師に関する情報を載せるのを阻止しようとしているのではないかとときどき考えたりします。とにかく本号はいつもよりも約一週間おくれて発送されることになりました。今後は発行日付に先立って毎月の十五日を発送日にしたいと思っています。

新刊書"イエスの知られざる教え"は私を通じて（注。ハニー氏を通じて）入手できます。この書にはエジプトで発見されて重要さにおいては死海の巻き物とならび称せられるナグ・ハマディの巻き物の訳文が載せてあります。厚表紙の装丁で三ドル五〇セントとなっており、イエスの初期の生活に関する文献に興味ある方におすすめします。

死海の巻き物の英訳を望まれる方には私の手元に（注。ハニー氏の手元に）ポケット版があります（九十五セント）。これは注解、索引、引用文などのついた厚い本です。死海の巻き物に関する他の多くのポケット版については十四頁からなるカタログに記載してありますから、カタログをおもちにならなければ申し込んで下さい。また私はトーマス・サグルー著"そこに河がある"をおすすめします。これはエドガー・ケイシーの伝記であって、この書に述べられている哲学の八十五パーセントまたはそれ以上はブラザーズの哲学と一致しています。この書から多くを学ぶことができるでしょう。前にも述べましたように、よき教育的な読書のための指針として私がすいせんする書物をお読み下さい。多くの知識を得ればそれだけやがて世界に与えられる知識を理解するのにすぐれた土台ができます。

コズミック・サイエンス・ニューズレターを発行し始めてから一ヵ年が経過しましたが、そのあいだに多くの事情が判明しました。まず、きわめて明らかになったのは、ほとんどの人はより大きな生命観を得ることに興味はないという事実です。すなわち、この人々は自分自身の考え方を堅固にすることにしか関心はありません。多数の人は自分のもっている既成概念以外の何かを意味する証拠類がもち出されるとそれを避けようとしているように見受けられます。

ところが驚いたことには、ぼう大な数のニューズレター購読申込者が申し込みを継続して激励の言葉を寄せてきました。私が期待した以上の継続申し込みがあり、加うるに一ヵ年を通じて新規申し込みが絶えずやってきて、特に宗教の起源に関する連載記事

を始めたときはそれが急激に増加しました。

昨年私は幽霊、幽霊現象、テレパシー、その他興味ある記事を載せましたが、あいにく多くの人はそれらを理解するのが困難であったようです。これはそうした現象を述べるのに引用した特殊な実例について読者の科学知識の基礎と教育とが欠乏しているためです。読者の八〇パーセントは哲学の連載記事に引用された実例を理解することはできませんでした。

そこで新たに一種の教育運動を近いうちに始めることにしています。多くの読者が科学のさまざまの部門について質問をよこされますので、私はそれをも解決したいと思います。しかしこうした質問のすべてに回答をお送りする時間的な余裕はとても私にはありません。そこでこの問題を解決するために、科学のあらゆる部門に関する参考書の目録をお送りします。この参考書は素人にわかりやすく書かれた最新の内容をもつもので、一般では入手できません。

読者はこの目録をごらんになって自分の最も興味ある部門の書籍を入手されるようにおすすめします。もし地方で入手できればそうして下さい。しかしできるだけ多くの種類を入手して、科学のあらゆる分野を網羅した一通りの参考書（十七頁下段へ続く）

宇宙の意識

G・アダムスキ

〝宇宙の意識〟とは何でしょうか。限られたわずかな紙数でこの意味を説明するのは容易ではありません。そこで私のなしうる最上のことは読者に一つのアイデアを与えることにあります。

人間は創造者によって三つの表現径路を授けられた唯一の創造物です。これを分類するのにまず精神的な面から始めることにしましょう。心は選択して分類するための自由意志をもっていて、おもにいわゆる生命の物質的または結果的な面をもっています。心による判断は心というものを作り上げている諸感覚器官を通じておこるのであって、このために個性または自我が存在するわけです。こうしてつくり出されるものには終わりというものがあります（肉体の心）

イエスや他の偉大な救世主たちは次のようなことをいっています。「肉体の心はほろぶべきものである」と。しかし肉体の心も意識をもっていて、これが人間の第三番目の部分です。心の感受力はこの意識にたいして敏感になっていて、その意識がなければ心は機能を発揮することができません。ところがこの意識は心の感受力がなくても作用することができます。これが意味するところは心に感じを与える意識なるものは実際には〝宇宙の意識〟であるということです。

肉体の感覚器官のもつ心にとっての大きな目的は、右のことに気づいて心それ自体を全包容的な意識にゆずり渡すことにあります。ここでは好き嫌いや区別の法則はもはや存在することはなくて、肉体の心は宇宙の意識と一体化します。もはや「私の意志がなされるのではなくて創造者の意志がおこなわれる」からです。キリストの真実の精神が内部に生まれるのはそのときです。キリストという言葉は、一つの個体を通じてあらわれた、全体のなかの一個の小片として宇宙の意識から引き出されたものです。だか

らイエスは次のようにいいました。「私はあなたがたにミルクを飲ませるが肉は与えない。あなたがたはキリスト（救世主）に抱かれた赤ん坊だからだ」

神のほんとうの息子または娘とはこの〝宇宙の意識〟なのであって、それは万物を支えている生命であり力でもあるのです。それは永遠の個人です。ひとたびわれわれがそれを知ってそれのもとに生きるならば「自分と父とは一体である」ということができます。これが生命の目的なのであって、そうなると一体化が感じられ、表現されて、こんにち見られるような分離というものはもはや感じられません。

個人としてのイエスが〝父〟と一体化したのはキリストを通じることによりました。結果の世界においてわれわれが道に迷ってしまった場所からわれわれをもとの家に帰させるのはキリストなるこの意識です。しかるに人間は結果のすべてを支えている因のかわりにこの〝結果〟を崇拝するようになっています。人間は一つの固定した現われと化していて、その場合、本性として宇宙的であるかわりに個性が有勢となっています。そのために人間はたがいに快・不快の影響を与え合っていて、永遠の平和を知ることはありません。平和というものは個人の意識が宇宙的になるときにのみ見いだされるものなのです。

〝宇宙の意識〟のなかには好き嫌いや区別はありません。あらゆる現象は始めも終わりもない全体の一部であるからです。〝宇宙の意識〟は現象すべての両親です。もっとよく理解できるように例を示すことにしましょう。心は人間をつくり出すことができるでしょうか。できはしません！　それでは人間の体内に人間をつくり出して、しかも人間の心の干渉なしにそれを完全な形に仕上げるのはいったい何でしょう。

母親は自身の体内に創造がおこなわれつつあることを知っていますが、彼女の心はそれがどんなふうにして達成されるのかを知りはしません。ただおこなわれていることを知っているにすぎません。意識である創造者が母親にたいして彼女の体内に創造がおこなわれていることを意識的に警告するのです。彼女の心は何が発生しているのかを知らないかもしれませんが、内部の意識は知っています。なぜならそれは〝万物を知る者〟と一体であるからです。

人間の心は一片の草をもつくり出すことはできません。心がやれるのは世の中ばかりでなく心自体をも喜ばせるために、人間の過失の貯蔵に頼ることだけです。このことは〝自我の意志〟が、〝神の意志〟すなわち〝宇宙の意志〟になるまでは続きます。

〝宇宙的〟及び〝意識的意志〟とは宇宙的な生命にたいする関心を意味します。それは自我の関心が優勢であるような個人的なものを意味するのではありません。

われわれは心または個性をただ失うためにのみその心または個性を吐き出してはなりません。そんなことをするかわりに、永遠の生命である〝宇宙の意識〟のなかへ個人の心を没入させるように努力すべきです。自身の（個人的な）生命を救おうとする者はそれを失うでしょう。〝宇宙の意識〟とはその永遠の生命です。そのなかには恐怖は存在しません。〝宇宙の意識〟とは意識的な意識の意識的な知覚です。

編集後記

◎ アダムスキ氏の〝おだやかに、賢明に、忍耐強く〟のなかに昨年三月末におこなわれた土星旅行に関する件が述べてありますが、この報告は当時各国のGAPリーダーにだけ送られて、事情により公表は禁じられていましたけれども、できればこれを次号に掲載したいと思っています。どうも本誌は頁数が少ないために記事を豊富に載せることができず、申しわけなく存じます。

◎ ア氏がその後もブラザーズとコンタクトを続けているのならば、なぜその体験記を次々と発表しないのか、いつも同じような哲学の焼き直しばかりではつまらないではないかと考える方があるかもしれませんが、実際には円盤・宇宙人問題の何たるかはア氏の例の三種類の書物に述べつくされています。円盤研究においては珍しい体験記類を興味本位で読む時期は過ぎてしまい、今は哲学と科学の探求時代に入っています。ア氏の哲学がいかなる意義をもっているかは、本誌中の記事をお読み下さるだけでおわかりになると思います。

◎ ハニー氏の〝現代の宗教の起源〟は、人間が昔からのくだらない習慣や行事にいかに縛られているか、いいかえれば非論理的思考からいかに脱しきれないかということを意味しています。

◎ 〝デスモンド・レズリーからの手紙〟はレズリー氏がハニー氏に送った書簡の全訳で、原文はハニー氏の機関誌一九六三年一月号に掲載されました。

◎ 近着の英国の〝フライイング・ソーサー・レヴュー〟誌（空飛ぶ円盤評論）三月・四月号によりますと、ソ連の科学者団は潜水館の乗員や宇宙飛行士を実験台としてテレパシー研究をさかんにやっているということで、テレパシー現象は脳の電磁波を利用する物理現象であって、肉体から生じる雑多な放射エネルギーを脳が反射し、それが空間を光速で進行して他人の脳の神経に刺激を与えるのだとソ連の一科学者は語っており、彼らは心霊現象説を否定しているということです。

◎ ところが国内の宗教団体のなかには円盤・宇宙人問題をやたらに心霊現象と結びつけて、とんでもない感違いをしているのがあります。円盤は高度な科学技術によって製作された一種の超精密な航空機であり、他の遊星の住民は地球人にたいして幽霊現象的にマボロシの如く出現したり霊眼の開けた人にだけ見えたりするのではなく、われわれと同様に肉体をもった現実の人間であるというのがア氏やハニー氏の主張するところです。

◎ ご質問は遠慮なくお寄せ下さい。（久保田）

通巻第十五号
日本GAPニュースレター
1963 3月・4月号
編集発行人 久保田八郎
発行所 日本GAP
島根県益田市益田古川
振替・松江二六三〇（久保田八郎個人名儀）
印刷所 益田タイプ
昭和三十八年四月十日発行
頒価一〇〇円（送料共）